

令和6年産水稻の作況調査結果と当面の技術対策

米麦畜産課
(農産振興室)

生育ステージ	早期：穂ばらみ期～出穂期（コシヒカリ） 早植：分けつ盛期～幼穂形成期 普通期：活着期～分けつ後期
生育概況	早期：生育は順調で、出穂期は平年並～やや早まると見込まれる（コシヒカリ）。 早植：生育は概ね順調。高温で経過しているため、藻類・ガス害の発生が多い。 普通期：移植後高温で経過しているため、植え傷みや除草剤による薬害、藻類・ガス害の発生が多い。

1 気象経過（前橋地方気象台の気象データ、7月は第3半旬までのデータ、参考資料参照）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
気温(平年差)	+3.2℃	+0.9℃	+1.4℃	+2.4℃	—	—	—
降水量(平年比)	98%	106%	114%	79%	—	—	—
日照時間(平年比)	87%	109%	139%	91%			

2 生育概況

(1) 概要

ア 早期・早植栽培（6月15日以前の田植）

早期栽培は、茎数は確保されており生育は順調。高温のため「コシヒカリ」の出穂期は平年並～やや早まる見込み。

早植栽培は、高冷地で育苗期間に気温低下が見られたため苗丈が短く活着の遅れが見られたが、移植後は高温・多日照のため生育は回復し、全域で茎数は概ね確保されている。高温による藻類やガスによる下葉の枯れが平年よりも多く見られる。

イ 普通期栽培（6月16日以降の田植）

移植後の高温による植え傷み、除草剤による薬害、ガスによる下葉の枯れや生育抑制が特に麦跡ほ場で多く見られる。

(2) 病害虫・障害等の発生状況

ア 早期・早植栽培

育苗期間では、高温によるヤケ苗、不揃い苗、もみ枯れ細菌病、ばか苗病が一部で見られた。

本田病害では、全域でばか苗病が散見される。

本田害虫では、中山間地域でイネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、東毛地区でイナゴ類、斑点米カメムシの発生が平年よりも多い。

障害では、藻類の発生、ガス害の発生が多い。

イ 普通期栽培

障害では、藻類の発生、ガス害の発生、除草剤の葉害が多い。

(3) 作況ほ等の調査結果

ア 作況ほの調査結果（表1参照）

県平均の移植後20日の草丈は31cm(過去平均比101%)、茎数は185本/m²(同104%)、移植後40日の草丈は53cm(同102%)、茎数は463本/m²(同93%)であった。

イ 農業技術センターの生育基本調査結果

稲麦研究センター（6月23日移植）

「あさひの夢」の移植後20日の草丈は34.3cm(奨励品種決定調査過去10か年平均比89%)、茎数は268本/m²(同76%)であった。

東部地域研究センター（6月4日移植）

「あさひの夢」の移植後20日の草丈は37.0cm(奨励品種決定調査過去10か年平均比117%)、茎数は459本/m²(同132%)、移植後40日の草丈は76.7cm(同117%)、茎数は501本/m²(同81%)であった。

表1 水稻作況ほ調査結果（地域別・作期別）（）内は平年比

調査項目 地区	移植期 月/日	移植後20日調査			移植後40日調査		
		か所数	草丈 cm	茎数 本/m ²	か所数	草丈 cm	茎数 本/m ²
県	6/6(0)	12/15	31(101)	185(104)	6/15	53(102)	463(93)
中部	6/15(0)	4/4	33(104)	204(104)	0/4	—	—
西部	6/11(0)	3/4	31(101)	177(116)	2/4	69(109)	455(102)
北部	5/22(+)	4/4	28(99)	170(93)	4/4	45(98)	467(89)
東部	6/16(-3)	1/3	32(93)	193(119)	0/3	—	—
早期・早植	5/28(0)	8/10	29(103)	202(103)	6/10	53(102)	463(93)
普通期	6/21(-1)	4/5	34(97)	152(105)	0/5	—	—

注1) 県、地区、作期別の平均値はいずれも算術平均とした。

2) 移植期欄の()内の「-」は早い、「+」は遅いを示す。

3) 7月15日現在で調査時期となったほ場のみ値で、か所数欄は「調査か所/設置か所数」を示す。

4) 早期・早植：6月15日以前の田植。普通期：6月16日以降の田植。

5) 桐生市は担当農家変更のため、県、地区、作型平均から除外した。

6) 館林市は移植時期が大幅に遅れたため、県、地区、作型平均から除外した。

(4) 作柄のまとめ（表2）

各地域の作柄は、すべて「並」であり、県全体では「並」が見込まれる。

表2 地帯別作柄概況（）内は農畜産課・地区農業指導センター

地域別	作柄	作 柄 概 況
中部 (中部) (渋川) (伊勢崎)	並	・早植栽培：分けつ後期～幼穂形成期。移植作業は順調に進み生育は順調。標高の高い本田の一部でイネミズゾウムシが発生。 ・普通期栽培：活着期～分けつ盛期。麦の脱粒や、倒伏等で刈り残したほ場が多いため、高温で経過したことからガス害や赤枯症状がやや多く見られる。藻類の発生が多く、植え傷みや除草剤の葉害も散見されている。
西部 (西部) (藤岡) (富岡)	並	・早植栽培：分けつ盛期～幼穂形成期。藻類の発生が多く、ガス害や赤枯症状が散見される。 ・普通期栽培：活着期～分けつ盛期。藻類の発生が多く、麦跡ほ場ではガス害による生育不良や遅れが見られる。

北 部 (吾妻) (利根 沼田)	並	・早植栽培：分けつ盛期～穂ばらみ期。育苗期は高温によるヤケ苗、不揃い苗やもみ枯れ細菌病、ばか苗病が一部で見られた。5月上旬の低温により苗丈が短くなったり、活着遅れが見られた。その後は気温の上昇で順調に生育しているが、藻類のウキクサの発生、赤枯症状が多く見られる。イネミズゾウムシ、イネドロオイムシがやや多い。
東 部 (東部) (桐生) (館林)	並	・早期栽培：穂ばらみ期～出穂期（コシヒカリ）。幼穂形成期～減数分裂期（あさひの夢、にじのきらめき）。生育は順調で茎数は確保されている。コシヒカリの出穂は6月中旬以降の高温により平年並～やや早まる見込み。カメムシ類、イナゴ類・藻類が多い。 ・早植栽培：分けつ盛期～幼穂形成期。生育は順調で茎数は概ね確保されているものの、高温によるガス害で分けつ抑制されているほ場も見られる。ばか苗病（太田）、イネドロオイムシ・イネミズゾウムシ（桐生）、イナゴ類（館林）、藻類が平年よりも多い。 ・普通期栽培：分けつ前期～分けつ盛期。田植え後が高温多照で、藻類の発生やガス害による葉の黄化が平年より多く見られた。一部で苗におけるばか苗病の発生。

3 技術対策

(1) 全般

気象庁の長期予報では、向こう1か月以上は高温傾向が続くことが予想されているため、高温による生育の前進が見込まれる。また、穂ばらみ期～登熟期が高温となった際は、不稔や白未熟粒・胴割粒等の発生が懸念される。

(2) 早期・早植栽培

ア 穂肥は葉色や生育量および幼穂長を確認して、適期・適量を施用して収量の確保と高温障害（白未熟粒・胴割米）の軽減を図る。

イ 病虫害は、天候や今後の発生状況および発生予察情報を踏まえ、適期防除に心がける。ばか苗病の発生が見られる場合は、株ごと抜き取りを行う。

ウ 穂ばらみ期から出穂後7日までは、湛水管理とし、それ以降は間断かん水を基本とする。ただし、穂ばらみ期以降に高温が続く場合は、田面の高い部分が水で隠れる程度にかん水し、足跡に水が残る程度に自然減水したのち、再びかん水を実施する「飽水管理」を繰り返したり、夜間入水の実施や、かん水回数の増加で地温低下を図る。なお、掛け流しかん水は用水不足となるためなるべく控える。また、出穂後の高温・強風時や台風襲来時は、風がやむまで湛水管理を行い、品質低下を防止する。

(3) 普通期栽培

ア 水管理は浅水で管理を行い、分けつの確保を図ることを基本とするが、水温が高い場合はこまめなかん水の実施で水を入れ替え、地温低下を図る。

イ 有機物の分解によるガス害が懸念されるほ場では、間断かん水や軽度の中干しによりガスの放出を促す（夜間落水、日中入水）。有効茎が確保できたほ場では中干しを開始し、生育量の制御と根の健全化を図る。

ウ 中干し後は根腐れ防止のため間断かん水を基本とするが、高温が続く場合には飽水管理を実施する。

エ 中干しに合わせ、ケイ酸カリ（20～40kg/10a）または塩化加里（10kg/10a）の追肥を行い、根の機能回復を図る。

オ 穂肥は葉色や生育量および幼穂長を確認して、適期・適量を施用して収量の確保と

高温障害（白未熟粒・胴割米）の軽減を図る。

カ 天候や病害虫の発生状況および発生予察情報を踏まえ、適期防除を心がける。ばか苗病の発生が見られる場合は、株ごと抜き取りを行う。稲こうじ病の発病履歴のあるほ場では、薬剤により防除適期が異なるが出穂 20～10 日前を目安に防除を行う。

《参考資料》

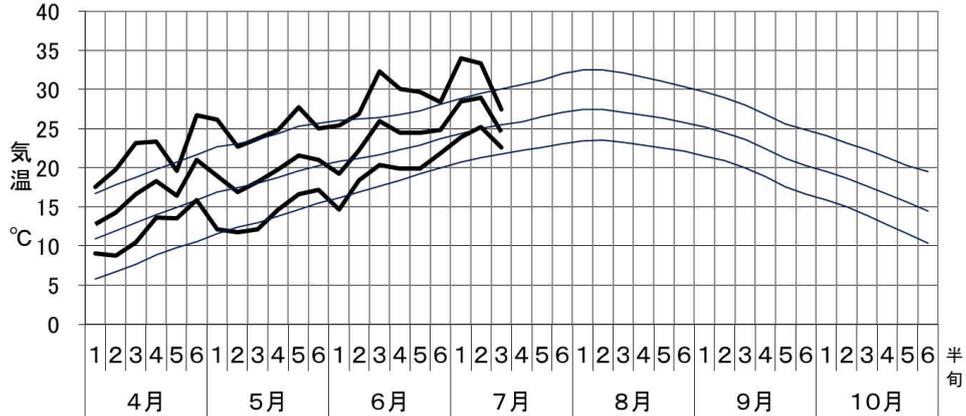


図1 気温

— 本年 — 平年

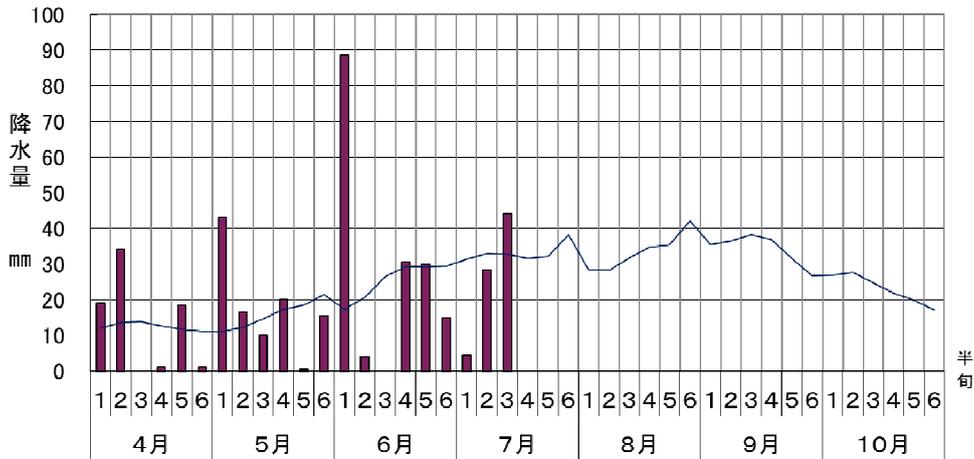


図2 降水量

■ 本年 — 平年

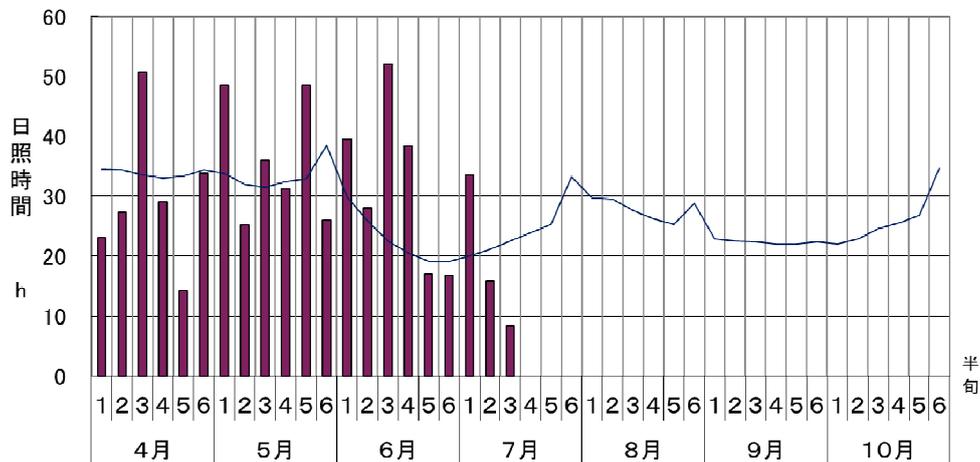


図3 日照時間

■ 本年 — 平年